２０２１年度　図工・美術部会　研究計画

Ⅰ　研究主題　　子どもが自分の「よさ」や「できる」に出会う授業づくり

～「考え」「つくる」を行き来し、子どもたちの個性と向きあう～

Ⅱ　研究目的

１．研究の経過

年次	年度	研　究　の　概　要	研究の成果
47 48	2012 2013	・子どもの「こうしたい」があふれる空間	子どもの「こうしたい」を引き出す手立てを検証した。
49 50	2014 2015	・子どもに「やってみたい」「おもしろそう」と思わせる題材の考察	原点に立ち戻り，意欲を引き出す題材について交流した。
51 52	2016 2017	・子どもを主体とし，創造の喜びを生み出す環境設定や授業づくりの考察	子どもの目線に立った題材設定や授業づくりについて検証。
53 54	2018 2019	・子どもが主体的に授業や教材と向き合い、技能を活かして、豊かな発想や構想を引き出す授業づくりの考察	身につけた技能を活かし自分らしい表現を深めることができた。

＊55 次についてはコロナ禍における研究方法の制限があったため、56 次に研究内容を引き継ぐ

２．主題設定の理由

５１年次と５２年次の２年間の研究では、子どもの関心・意欲・態度を大切にするとともに、子どもの豊かな発想・構想を引き出し、それらを実現するための創造的な技能を高めることを研究内容とした。また、学習指導要領で示された「共通事項」の部分も意識して進め、校種間の理解と連携が深まるよう、交流の持ち方を工夫した。一方で、研究内容が「題材について」「授業の手立てについて」「環境設定について」と多岐にわたり、より重点を明確にした主題設定を求める声が上がった。

５３次と５４次の２年間の研究では、学習のねらいを明確にすることで、目的意識を持って授業に参加する心情を育む研究内容となった。子どもが主体的に授業や教材と向き合い、豊かな発想・構想を引き出すための「技能」を獲得することで、それらを実現するための研究内容とした。身につけた技能を活かして、自分らしい表現にまで深めることができた子どもが多数いたことは、大きな成果であった。また、新学習指導要領の実施に向けて、教科としての特性を踏まえ、改訂部分を意識した教材や授業展開などが意識され、実践されたことは大きな成果と言える。

５６次は、2020 年度より小学校から順に改訂される新学習指導要領に基づいて、研究主題や内容を立ち上げた。改訂の要点として「育成すべき資質である三つの柱～『知識及び技能』『思考力、判断力、表現力等』『学びに向かう力、人間性』」そして「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わることや、物事を捉える視点や考え方を働かせること」が示されている。全過程を通して、つくり・つくりかえ・つくる活動を保障することから、自分だけのよさや個性にあふれる作品を生み出すことができる授業づくりの研究を行う。また、「もっと、こうしよう」という向上的で創造的な意志や意欲が学びにつながり、自らの生活を楽しく豊かにしようとする人間性へとつながってくる、学びの「出口」を明確にした授業づくりの研究を進めていきたい。

３．研究仮説

可能性を模索する図工・美術の授業に向かうことで 子どもたちは、思いの実現に近づくことができるだろう。

Ⅲ　研究内容

研　究　主　題	研　究　内　容	2021年重点	2022年重点
子どもが自分の「よさ」や「できる」に出会う授業づくり ～「考え」「つくる」を行き来し、子どもたちの個性と向きあう～	１．子どもが，創造的な発想・構想を持つために	◎	
	２．子どもが，思いを可能にするための技能を身につけるために		◎
	３．子どもが，全過程を通してよさや美しさを感じとれるために	○	○

１．子どもが，創造的な発想・構想を持つために（本年度の重点）

（A）創造的な発想・構想が生まれる授業づくり

→子どもが、授業の意図や目的をとらえ、つくりたいもののイメージが明確に持てるようにする。

・子どもの発達段階や興味・関心を捉え、題材に加味する、授業の工夫。

・豊かな発想を促すために、どのような働きかけを、どのようなタイミングで与えるか工夫する。

・生活や社会、地域・土地の特性を活かした題材設定の工夫。

２．子どもが，思いを可能にするための技能を身につけるために

（B）工夫が繰り広げられる表現活動

→子どもの思いを可能にする表し方に必要な知識や技能が、身につくようにする。

・子どもが題材ごとの学びのつながりを意識できる指導の工夫。（既習事項の活用）

・用具などの安全面での配慮、子ども自身が用具に「慣れる」授業の工夫。（技能を身につけたことによる主体的な行為をうながす支援のあり方）

・子どもが試しながら自ら発見し、相互に学び合う場の工夫。（活動の全過程を通して、「つくり・つくりかえ・つくる」の繰り返し）　＊上記（A）との一体化

３．子どもが，全過程を通して、よさや美しさを感じとれるために

（C）満足感や達成感が持てる表現活動

→子どもが、つくっているものやつくったもの、関わったものに価値を見いだせるようにする。

・子どもの達成感を受信、確認する手立て、その後の指導への活かし方の工夫。

・子どもの満足感を大事にする作品の扱い方　　～制作途中の鑑賞や交流、展示、返却方法などの工夫。

（D）思いを読み取り，伝える鑑賞活動

→子どもが、造形作品や身の回りにある場所やものの価値に気づき、大切に思える。

・自他の作品を媒体として、各自の思いを伝え合う活動の工夫。～対話的な学び（制作途中の対話）

・美術作品に触れ、感じたことを伝え合う活動　　～対話型鑑賞などの実践と検証。

４．共通事項

（E）環境づくりの工夫

→上記３項を実現させるための環境づくり。

・教育課程（カリキュラム）や用具、人的環境を充実させる工夫など。

・子どもの意欲に結びつく教室環境、展示環境（ディスプレイ）の作り方。

５．子どもに育みたい力

評価の観点	具体的な児童・生徒の動き
知識及び理解	えらぶ　決める　バランスをとる　ためす　創造する
思考力、判断力、表現力等	広げる　深める　見通す　比べる　感じ取る　受け入れる　練る
学びに向かう力、人間性等	楽しむ　進んで活動する　味わう　満足する

＊児童・生徒の実態と、題材のねらいと関連させ、育みたい力をおさえた上で、授業作りを進める。

Ⅳ　研究方法

①　第二次研究協議会

⑴ 研究授業…小学校低学年、高学年、中学校各１学年で行うことを基本とする。

⑵ 全 体 会…本次研究について、中心グループでの研究推進についての説明を行う。

⑶ 分 科 会…研究授業の話し合いと実践レポート及び作品交流を行う。小・中学校間の交流を強化する。

⑷ 実践アトラクション…各市町村より持ち寄った実践の紹介および実技研修を行う。

②　理論研修

研究主題に迫るための理論研修会を開催する。

③　実技研修（実践アトラクション）

材料・用具・技法・指導法等，指導力の向上を図ることのできる場として、実技研修を開催する。

④　「石狩の作品集」の発行

子どもの作品から受けとめるべき内容とその視点について研修を深めるための資料として発行する。

⑤　部会だよりの発行

研究員は資料・情報を提供し、日々の研究実践に役立てるよう必要に応じて部会だよりを発行する。

Ⅴ　研究体制と方法

⑴ 各市町村

ア．中心サークルとなった市町村は、授業づくりを中心にして共同研究を進める。

イ．中心サークル以外の市町村は、独自の研究授業や実践交流での内容・成果・課題の共同研究化を進める。

⑵ 部会員

ア．児童生徒の作品の収集・保存

子どものコメント（想いやアピールなど）と担任の受け止め方とともに作品資料をまとめておく。

（制作中の写真やVTR，資料などもあるとよい）

イ．実践レポートの作成

子どもの作品や、実践の様子などを図や写真を盛り込みながら、取組内容が伝わるものを作成する。

Ⅵ　年間計画

４月	○第一次研究協議会 ○役員・推進委員研修会	・体制確認と業務分担 ・研究内容と方法の確認
５月	○役員・推進委員研修会	・研究方法の具体化
６月	○教育課程研究委員研修会	・教育課程改善に向けた指導案例作成
７月	○役員・推進委員研修会 ○理論研修会	・第二次研究協議会の実施要領検討 ・講師による研修会
８月		
９月	○第二次研究協議会指導案検討役員・推進委員研修会	・授業研の授業案検討 ・第二次研究協議会の内容詳細　　レポート帳合
10 月	○事前研修会 ◎専門部会第二次研究協議会	・事後研・分科会の内容協議 ※実技研修会も含めて企画の予定
11 月	○教育課程研究委員研修会	・教育課程の工夫・改善に向けての取組等
12 月	○役員・推進委員研修会 ○「石狩の作品集」	・本年度の研究の成果と課題のまとめ ・発行に向けての編集作業
１月	○役員・推進委員研修会	・次年度研究計画の提示
２月		

参考文献等

・日本文教出版『学習指導要領新旧対照表小学校図画工作科』図画工作「新学習指導要領を読む」阿部宏行
・日本文教出版『新・図工の ABC』阿部宏行
・日本文教出版『学習指導要領新旧対照表中学校図画工作科』図画工作「新学習指導要領を読む」村上尚徳
・日本文教出版　令和２年度版『図画工作』年間指導計画案
・第６７回全道造形教育研究大会釧路大会講演『新学習指導要領とこれからの表現や鑑賞』岡田京子
・学びと美術『図画工作科・美術科が今できること』奥村高明
・２０１９年度石教研図工・美術部会実技・理論研修会講演『大切なものをつくり出すために』阿部宏行
・第１３回熱く美術教育を語る会講話『造形教育の変遷』渡辺貞之
・２０１９年度石教研図工・美術部会第二次研究協議会アンケートのまとめ

（文責　村井　宏子）